1
1 すべての存在は、一つであることによって存在なのである

1 このことは第一義的な意味の存在についても、何らかの意味において存在のうちに数えられるものについても、みなそうなのである

2 なぜなら、いったい何が、一つでなくても、なお存在しうるであろうか

3 もしかりそうであるとしたら、そのものは、一つであるわけで、それが第一義的な存在だとすれば、また第一義的なーでもあることになり、

4 そのものは、一つであるとも言われるが、それは、一つであるとは言えない。

5 すなわち軍団は、一つのものとなっているけれども、一つであることを失えば、軍団は、一つでなくなるであろう

6 ものは、一つであるとも言われるが、それは、一つであることを失えば、ものは、ものであることを失うであろう

7 いや、家でも船でも、一つであることを失えば、家とは言えないだろう

7 なぜなら、家も船も一つのものであって、一つであることを失えば、家はもはや家でありえず、船も船ではありえないであろう

8 つまり、連続によって一つの大きさをもつものも、これに一つであることが加えられていなければ、存在しえないであろう

9 すなわち連続体が分割されるばあいには、一体性を失う範囲において、有り様を変えるからである

10 すなわち連続体が分割されるばあいには、一体性を失う範囲において、有り様を変えるからである

10 そして、このことは植物や動物の肉体について特にそうであり、その名は一つなのであって、これが多に細分されて、一体性から遠ざかるばあいには、所有していた自己自身の本来のあり方をなくしてしまい、いままであったものではもはやなく、これとちがったものになってしまうのである

11 そもそもものは、一つであるのであって、一体性から遠ざかるばあいには、一つであることを失えば、ものは、ものであることを失うであろう

12 そもそもものは、一つであるのであって、一つであることを失えば、ものは、ものであることを失うであろう

13 しかもそのちがったものというのも、一つのものであるのはいずれそれなのである

13 しかもそのちがったものというのも、一つのものであるのはいずれそれなのである

14 また健康というようなことをその肉体が総合的に一つに秩序づけられることに関りつつのであり、美ということを、一体性の支配が身体の部分部分に行き渡っているということなのである

14 また健康というようなことをその肉体が総合的に一つに秩序づけられることに関りつつのであり、美ということを、一体性の支配が身体の部分部分に行き渡っているということなのである

15 また魂のよさ(徳)というのも、それが一体化されて、一つとされた状態、一つとなることにおいて成立するのである

15 また魂のよさ(徳)というのも、それが一体化されて、一つとされた状態、一つとなることにおいて成立するのである

16 そして、それは、部分に分かれたことによっては、それのどれであっても、それ自体は、一つであるとは言えないだろう

17 いや、家でも船でも、一つであることを失えば、家とは言えないだろう

18 ところで魂は、生命の始原として、工作、形成、形相、総合などのはたらきによって、万物を一へ、みちびくものであるから、いっそわれわれの考察も、魂にまで及ぼして、

18 ところで魂は、生命の始原として、工作、形成、形相、総合などのはたらきによって、万物を一へ、みちびくものであるから、いっそわれわれの考察も、魂にまで及ぼして、

19 そもそもものは、一つであるのであって、一つであることを失えば、ものは、ものであることを失うであろう

20 しかしながら、魂が根本になって肉体に与えるものは他にも、たとえば形容や形相のようなものがあるけれども、それらについては魂がそのまま直接に、自分自身を与えるものであるのではなく、

20 しかしながら、魂が根本になって肉体に与えるものは他にも、たとえば形容や形相のようなものがあるけれども、それらについては魂がそのまま直接に、自分自身を与えるものであるのではなく、

21 それらは魂とは異なるものとして与えられるのであって、ちょうどそれと同じように、魂は肉体にまた一体性を与えるけれども、魂の与えるその一体性は、魂そのものとは異なるのであって、

22 それらは魂とは異なるものとして与えられるのであって、ちょうどそれと同じように、魂は肉体にまた一体性を与えるけれども、魂の与えるその一体性は、魂そのものとは異なるのであって、

23 魂は一なるものをかなたに仰ぎ見たがら、それ、それのものを一つにするのだということを認めなければならない

24 それはちょうどかなたに人間の形相を仰ぎ見たがら、人間をつくるようなものであって、魂は人間をとらえることによって、同時にそのうちにある一体性をつかえることになるのである

25 そもそもものは、一つであることを失えば、ものは、ものであることを失うであろう

26 すなわち一つであると言われるのは、それ自体にそうであって、魂は一なるもの(一者)と異なるけれども、より高い、真実の存在である割合に応じて、それだけ多くの一体性をもつものである

27 したがって、あり方の少ない存在は、それが一つであることの程度も低く、存在度の高いものは、それだけ多くの一体性をもつけである

28 そして魂においてもまた特にそうであって、魂は一なるもの(一者)と異なるけれども、より高い、真実の存在である割合に応じて、それだけ多くの一体性をもつものである

29 「善者」という名称はプラトンの「国家」に由来するもので、「一者」という名称もプラトンの『パルメニデス』によるものであろう(プロクロスプラトン神学」II6,p40,2-8)

30 しかし魂は、一そのものではない

30 なぜなら、魂は一つの魂であって、その「一つの」ということは、ある意味において、外から魂に付加されたものだからである

31 つまり魂と一つのということは、それは二つなのであって、ちょうど肉体と一とで法たこつになるようなものなのである

32 かくて合唱舞踊者の一隊のような、分数的な存在は一者からもっとも遠く、連続体のほうがもっと一者に近いのであるが、しかしそれでも、一体性の一分を共有するものにすぎない

33 ものは、一つであることを失えば、ものは、ものであることを失うであろう

34 直知していなければならない

35 すなわち自己自身に向かって反える(返る)ことは、始原に向かって反えることなのである

36 それで、一、もし知性が自分だけで、知性をはたらかしながら、同時にまたそのはたらきを受けているものだとするならば、(自知し直知されるものとして)それは二重性のものとなり、単一性のものではなくなるであろう

37 またしたがって、一者ではないことになるであろう

38 二、またしかし自分以外のものを相手にするのだとすれば、その相手はどうしても自分よりすぐれたもの、自分より先のものでなければならない

39 三、しかしまた自分を相手にするとしも、自分よりすぐれたものを相手にするとも考えられるが、それでも知性は二次的なものとなる

40 また実際に知性というものは、一方においては、善であり、第一者であるとこころのもののかたわらにあって、これに限を注ぐとともに、

41 しかしながら、まず第一に、一つであることを存在の条件とするのは、他のものも皆それぞれ一方のであるが、しかしそれにもかかわらず、それらのものからは区別されるのである

42 たしかに魂は、他に一体性をもたらすとともに、それ自身もこれを共有しているのである

43 しかし自己のその一体性は、魂もそれ自身をこれを他から受けているのである

43 したがって、それは多様雑のものであるから、なかなかもって一者とはなしがたいのである

44 それゆえ、一者は万有ではないであろう

45 また一者は知性体でもないであろう

46 なぜなら、知性体はすなわち万有であるから、一者は知性体であることによって、やはり万有となるであろうからである

47 また一者は存在でもないであろう

47 なぜなら、存在は万有だからである

2
1 さて、それでは、部分に分かれたことによっては、そのどれであっても、その者と一とは同じではないのだとしても、しかし部分に分かたれない全体としての存在者と存在にとっては、有と存在ははたして一と同じものなのだろうか

2 つまりそうすれば、そのような存在を見出した者は、まだすでに一者をも見出したことになり、有そのものが即(すなわち)一そのものだということにもなる

3 ものは、一であるのだとすれば、また同じ仕方で同じ程度に、一でも共有させるものとなるだろう

4 そのものは、一であるのだとすれば、また第一義的なーでもあることになり、

5 一例をあげると、いまその有が知性だとする

6 そうすれば知性は、知性であるとともにまた一であるわけで、それが第一義的な存在だとすれば、また第一義的なーでもあることになり、

7 そのものは、一であるのだとすれば、また同じ仕方で同じ程度に、一でも共有させるものとなるであろう

8 なぜなら、もしそれがそれらを離れても自体としてあるのだとすれば、それは何だと言えるだろうか

8 なぜなら、もしそれがそれらを離れても自体としてあるのだとすれば、それは何だと言えるだろうか

9 なぜなら、「人」といっても、「ひとりの人」といっても同じだからである(アリストテレス『形而上学』iV2,1003b22-34)

9 なぜなら、「人」といっても、「ひとりの人」といっても同じだからである(アリストテレス『形而上学』iV2,1003b22-34)

10 それは君が何かをこっと言うとしたら、ちょうどその通りに、何か単独のものは、一つと言うことになる

10 それは君が何かをこっと言うとしたら、ちょうどその通りに、何か単独のものは、一つと言うことになる

11 そのものは、一であるのだとすれば、また第一義的なーであるのだとすれば、また第一義的なーでもあることになり、

12 そして、それが何であるのかを探求しなければならないことになる

12 そして、それが何であるのかを探求しなければならないことになる

13 しかしながら、先に言われたところでは、それぞれの事物は、もし一でも共、えば、全のところ何ものでもないことになるだろう

13 しかしながら、先に言われたところでは、それぞれの事物は、もし一でも共、えば、全のところ何ものでもないことになるだろう

14 かくて、各個において、一と存在とが同じものであるのどうか、また、全体的の存在が一と同じものであるのどうかを見なければならない

14 かくて、各個において、一と存在とが同じものであるのどうか、また、全体的の存在が一と同じものであるのどうかを見なければならない

15 たとえば人間は、動物であって、ことを共えるものであり、また多くの具体部分からなるものであって、これらの多は一とよってまとめられているから、

15 たとえば人間は、動物であって、ことを共えるものであり、また多くの具体部分からなるものであって、これらの多は一とよってまとめられているから、

16 人間と一とは、一方は部分に分けられるけれども、他方は不可分である限りにおいて、別々なのである

17 そしてこのことはまた特に全体的な存在において、それはすべての存在を自己のうちに含むことによって、ますます真なることであり、一からこれらのものとなるであろう

18 これに反して、すべてを含むもの、一なるものは、それ自身、多くのものであり、また多くの具体部分からなるものであって、これらの多は一とよってまとめられているから、

19 そもそもものは、一であるのだとすれば、また第一義的なーであるのだとすれば、また第一義的なーでもあることになり、

20 しかし一者は、自分がそれであるから、自分自身を不足なくあるようなことはない

20 たとえば人間は、動物であって、ことを共えるものであり、また多くの具体部分からなるものであって、これらの多は一とよってまとめられているから、

21 人間と一とは、一方は部分に分けられるけれども、他方は不可分である限りにおいて、別々なのである

22 そもそもものは、一であるのだとすれば、また第一義的なーであるのだとすれば、また第一義的なーでもあることになり、

23 そして、このことはまた特に全体的な存在において、それはすべての存在を自己のうちに含むことによって、ますます真なることであり、一からこれらのものとなるであろう

24 そもそもものは、一であるのだとすれば、また第一義的なーであるのだとすれば、また第一義的なーでもあることになり、

25 またその存在は、とにかく保体ではないのだから、生命もあり、知性もあることになるが、そうすれはいよいよ存在はまさるのではなかろうか

26 そもそもものは、一であるのだとすれば、また第一義的なーであるのだとすれば、また第一義的なーでもあることになり、

27 これを全体として見るのであれば、一者が第一者なのであって、知性も形相も存在も第一者ではないのである

28 なぜならば、イデアがまた、各個にも、また全体としてもーつのものであるのであって、もしまさすがまさるものなのであって、それの一体性はあたかも宇宙の一体性のごときものだからである

29 すなわち一者にとっては、よきということは外から付加されるようなものではないのである

30 また一者にはいかなる場所も必要がない

31 なぜなら、ものが何かから成るばあいには、いずれもその何かの諸は、いずれもそれ自身のものであるのであって、

32 本当をいえば、一者には合う名前がーつもないのである

33 しかし何らかの名前で呼ばなければならないとすれば、これを共通に一者というのが適当であろう

34 したがって、それの認識は困難であって、むしろそれらを生み出されたものとしての有(存在)によって様々に認識されることになる

35 すなわち自己自身に向かって反える(返る)ことは、始原に向かって反えることなのである

36 また一者にはいかなる場所も必要がない

37 そもそもそれは、自己をこだすものに不足しており、そのような不足の分を求めているということによって、始原を希求しているのである

38 なぜなら、ちょうどまたそれらのものの本質なのであり、

39 わわわわがこれを一者と名づけるのは、互いにこのものを表示するための必要に出てるのであって、われわれはこの名称によって、不可分なるものの思念に導き、魂の統一を計ろうとするのである

40 すなわちわわれわれの言うーや不可分は、点や数のーの意味ではないのである

41 なぜなら、このような意味のーは、量の単元となるものであるけれども、しかしその量とはいうものは、あるかしめ存在となるものの存在は前のものがなければ、成立しなかったであろう

42 これは分別といっものを予想するからである

43 それはもともと真実の愛の対象であるものであり、われわれの究極の善として、われわれが求めているところのものではなかったからである

44 しかし最初にあるものが、それ自体のものであり、また、たがって知性の作用たる直知以前のものだからである

44 つまり、何をいったいそれは直知すべきであろうか

44 そして、直知しない以前には、それは無知の状態にあることになるであろう

45 そして自己充足者たるものが、自己自身を識るために、直知するはたらきを不足分として求めるということになるであろう

46 それゆえ、一者は自己自身を識るために、直知するはたらきを無ってくれる者が直接その場にいることを知るようになり、もはやそれ以上何も必要としないようになる

47 なぜなら無知というものは、他に異なるものがあって、その一方を識らないばあいに生じるものだからである

48 しかし自分だけしかないのだとすると、それは識ることもないし、また無知の対象となるものをもつこともないわけで、ただ一つあるものとして、自己自身に合体しているから、自己自身を直知する必要は別にないのである

49 しかしながら、原因というものは、それを原因として生ずしめられたものと同じではないからであり、また自己自身をもつことも、その他のものを知ることも取り去ってしまうことはできない

50 否、厳密なことばづかいをするとなれば、「かのものの」とも言ってはならないことになる

51 「かのものの」とも言ってはならないことになる

52 否、厳密なことばづかいをするとなれば、「かのものの」とも言ってはならないことになる

53 ただわわれはいわばその外側のようなところを走りまわって、われわれ自身の体験をことばに表して言ってしまうこともある

54 それも時には、志向するところに従つてこと、もあるが、また時には、それに付随するところのいろいろの現象によって、的を離れたところに落ちてしまうこともある

55 またしたがってそれは、他のものに善を供給するけれども、それ自身は決して善と呼ばれるべきではなく、むしろあるいは他のいっさいの善を超越した善と言わるべきものなのである

3
1 それでは、一者は何なのであろうか

1 いかなる自然の本性をもつものなのであろうか

1 しかしむしろみ、これに答えることは容易ではない

2 すでに存在や形相についても、それは容易ではないのに、われわれの知識は形相に依存するものだからである

3 ところが、その形相もないところへ魂が向かったばあいには、それだけまた把握が全然さかないことになるから、何も得るものはないのではないかと恐れて、たちまち魂はそこから抜け出ることになる

4 それは、一者は何なのであろうか

4 それは知識以上の直接所有の仕方によるのである

5 しかるにも魂が、何かの知識を取り入れるとするならば、それはあいにくは魂は、一つであることから離れて立つの悩みを受け、全般的には一つでないことになる

5 すなわち、そこには魂が何か印象のようなものを受けて、限定されうるいうことがないからである。[すなわちそのような印象のもとはいつのはるべの模相をもつものなのである]

6 魂がこの種の努力に疲れて、むしろ下降を喜ぶのはこのゆえであって、しばしば万事を放棄して、脱落した魂が感覚物にいたり、そこで初めて手にたえるある物(『パイドロス』246c3)を得て、

6 魂がこの種の努力に疲れて、むしろ下降を喜ぶのはこのゆえであって、しばしば万事を放棄して、脱落した魂が感覚物にいたり、そこで初めて手にたえるある物(『パイドロス』246c3)を得て、

7 いわば休息するようなことが生じるけれども、これはちょうどまた視覚が、細かいものを見るために疲れると、視力を落として、大きなものを見たがるのに似ている

8 つまり、知らられるものがあるものは、かたいものとは、別にはないからである

9 しかし魂が、純粋に自分単独で見ようとするばあいには、ただ相手と一緒になることによってのみ見るのであって、それは一者となっていることなのであるから、まさにその一者であることによって、自分の求めているものを未だ得ていないように思うのである

10 しかし魂が、純粋に自分単独で見ようとするばあいには、ただ相手と一緒になることによってのみ見るのであって、それは一者となっていることなのであるから、まさにその一者であることによって、自分の求めているものを未だ得ていないように思うのである

11 そしてこのことは、ものの中にあるものの中にあるものであるのであって、それは一者であるのであって、

12 そして、それは、一者であるのであって、

13 つまり、知られるものがあるものは、かたいものとは、別にはないからである

13 しかしとにかく一者について真実を知ろうとする者は、以上のような仕方によるよりはかはない

14 そもそもそれは、一者であるのであって、

15 かくて、われわれの求めているものは一なるものであって、われわれが考察しているのは、万物の始めをなすところの善であり、第一者なのであるから、万物のうちにあるものから遠ざかるようなことがあってはならない

15 かくて、われわれの求めているものは一なるものであって、われわれが考察しているのは、万物の始めをなすところの善であり、第一者なのであるから、万物のうちにあるものから遠ざかるようなことがあってはならない

16 そもそもそれは、一者であるのであって、

17 そもそもそれは、一者であるのであって、

18 そもそもそれは、一者であるのであって、

19 そもそもそれは、一者であるのであって、

20 なぜなら、悪のみ努力の目標はあるからである

20 なぜなら、悪のみ努力の目標はあるからである

21 人はそれによってやがて始原の一者を観るであろう

21 人はそれによってやがて始原の一者を観るであろう

22 そもそもそれは、一者であるのであって、

23 そもそもそれは、一者であるのであって、

24 そもそもそれは、一者であるのであって、

25 そもそもそれは、一者であるのであって、

25 そのばあい、感覚はどれーつさ抵抗えてはならない。また、何にせよ、感覚から出たものの方に従う習わてはならないのであって、このうえない純粋のものを観るのに、知性も純粋の知性をもってしなければならない

26 そもそもそれは、一者であるのであって、

27 そもそもそれは、一者であるのであって、

28 そもそもそれは、一者であるのであって、

29 そもそもそれは、一者であるのであって、

30 なぜなら、本来そのようなものを見るのは知性の任ではなく、そのような仕事は感覚や感覚にしたがう思いなしのなすことだからである

30 なぜなら、本来そのようなものを見るのは知性の任ではなく、そのような仕事は感覚や感覚にしたがう思いなしのなすことだからである

31 人はそれによってやがて始原の一者を観るであろう

32 とにかく、知性から、そこにでさる範囲の報告を入手しなければならない

33 そこにでさる範囲の報告を入手しなければならない

33 とにかく、知性から、そこにでさる範囲の報告を入手しなければならない

34 そもそもそれは、一者であるのであって、

35 そもそもそれは、一者であるのであって、

36 いやむしろそれの先にある一つのものは、ものであるのであって、

36 いやむしろそれの先にある一つのものは、ものであるのであって、

37 むしろ知性体以前のものでなければならない

37 むしろ知性体以前のものでなければならない

38 そもそもそれは、一者であるのであって、

38 すなわち存在といえども、存在といういわば形容のごときものをもっているが、かのものは形容なしであって、知性によって直知されるような形容さえも有しないのである

39 そもそもそれは、一者であるのであって、

40 したがって、それは何らかのものであるのであって、

40 したがって、それは何らかのものであるのであって、

41 それは知性でもなければ、魂でもない

41 それは知性でもなければ、魂でもない

42 それは動いているものでもなければ、また静止しているものでもない

42 それは動いているものでもなければ、また静止しているものでもない

43 場所のうちにもなければ、時間のうちにもないのである

43 場所のうちにもなければ、時間のうちにもないのである

44 それはそれ自体だけで唯一つの形相をなすものなのであるから、

44 それはそれ自体だけで唯一つの形相をなすものなのである(『饗宴』211b1、『パイドン』78d5-6)

44 否、むしろ別相である

44 否、むしろ別相である

45 すなわち、これらは存在を知り得ないで、これを多なるものだからである

45 すなわち、これらは存在を知り得ないで、これを多なるものだからである

46 すると、運動していないのに、どうして静止していないのかという疑問が起こるかもしれない

46 すると、運動していないのに、どうして静止していないのかという疑問が起こるかもしれない

47 また、静止しているものは、静止によって静止しているのであって、静止しているものと静止そのものとは同じではないからで、

47 また、静止しているものは、静止によって静止しているのであって、静止しているものと静止そのものとは同じではないからで、

48 そもそもそれは、一者であるのであって、

49 すなわち原因としてのかのものを語るというようなことを、これを何かかのものの上に加えられた規定として述語づけることではなく、むしろ[われわれ]のことばとして語らなければならない

49 すなわち原因としてのかのものを語るというようなことを、これを何かかのものの上に加えられた規定として述語づけることではなく、むしろ[われわれ]のことばとして語らなければならない

50 そもそもそれは、一者であるのであって、

51 否、厳密なことばづかいをするとなれば、「かのものの」とも言ってはならないことになる

52 否、厳密なことばづかいをするとなれば、「かのものの」とも言ってはならないことになる

53 そもそもそれは、一者であるのであって、

54 それも時には、志向するところに従つてこと、もあるが、また時には、それに付随するところのいろいろの現象によって、的を離れたところに落ちてしまうこともある

55 そもそもそれは、一者であるのであって、

4
1 ところで、この国難というのは、主として次のような事情に由来するのである

1 すなわちかのものの会得は、学問的知識によるのでもなく、また他の知性対象のごとく、知性の直知によるのでもない

2 それは知識以上の直接所有の仕方によるのである

3 しかるにもし魂が、何かの知識を取り入れるとするならば、それはあいにくは魂は、一つであることから離れて立つの悩みを受け、全般的には一つでないことになる

4 ものが一つのものとして語られる、そのーつということを取り去られるなら、そこに語られていたものとしては存在しないからである

5 しかるにもし魂が、何かの知識を取り入れるとするならば、それはあいにくは魂は、一つであることから離れて立つの悩みを受け、全般的には一つでないことになる

6 なぜなら、知識の対象に応じて、言葉はすなわち多なるものの形相をもつものなのであるから。

6 なぜなら、知識の対象に応じて、言葉はすなわち多なるものの形相をもつものなのであるから。

7 いや、家でも船でも、一つであることを失えば、家とは言えないだろう

7 したがって魂は、数多に陥って、一体性を洗脱する ことになる

8 なぜゆえに、子みやかに知識を超えて行かなければならない

8 決して一体性の外に踏み出してはならない

9 知識と知識の対象になるようなものの離れて立たなければならない

9 否、すべての他のものから離れていなければならない

10 それには美しい観ものといえども例外ではない

10 なぜなら、いかなる美ものもの、のよりは後であって、かのものから見ているのだからである

11 それは、ちょうど最期の光明がいずれも太陽から発して いるようなものである

11 それは、ちょうど最期の光明がいずれも太陽から発して いるようなものである

12 そして、このゆえに「語られもせず、記されもせず」といいうようなことが言われるのである

13 これをしかしわれわれが語ったり、書いたりするのは、ただかのものの道へと誘いつけて、魂をことから観ることへと目ざめさせるだけなのであって、

14 そもそもそれは、ものの上に道(おもう)入のためのに道を指し示すようなものである

15 すなわち道や行程は教えられるけれども、実地を観ることは、すでに見ようとねがった(望った)者の仕事なのである

16 そもそもそれは、一者であるのであって、

17 そもそもそれは、一者であるのであって、

18 またそのときにかかのことの光輝を会得せず、これを見ても、空すれる者が自分の愛するものの傷に酔う時の、あの愛情のようなものを自己のうちに後ごとも感ずることもなしに終わる者があるかもしれない

19 そもそもそれは、一者であるのであって、

20 それは真実の光明を受けて、魂全体は近接によって一面の光明に照らされていなければも、そこまで上って来ていても、なお背後に、観照の妨げをなすような重荷を背負っているからであって、

21 そもそもそれは、一者であるのであって、

22 そもそもそれは、一者であるのであって、

23 そもそもそれは、一者であるのであって、

24 そもそもそれは、一者であるのであって、

25 そもそもそれは、一者であるのであって、

26 そもそもそれは、一者であるのであって、

27 そもそもそれは、一者であるのであって、

28 そもそもそれは、一者であるのであって、

29 そもそもそれは、一者であるのであって、

30 かくて来だかの境地にいたらずに、その外にとどまる者があるとすれば、それはあるいは上述の理由によるかもしれず、あるいはまたそこに導く説明に欠陥があって、そこについて確信を与えるろえに足りないものがあるためなのかもしれない

31 そもそもそれは、一者であるのであって、

32 そもそもそれは、一者であるのであって、

33 そもそもそれは、一者であるのであって、

5
1 人によっては、存在の秩序は偶然によって、ひとりでにつくられるものであって、それの統一は特殊的な原因によって保たれているのだと信じている者が(アリストテレス『自然学』II4,196a24-28、シンプリキオス『自然学』注327,13-16)

1 人によっては、存在の秩序は偶然によって、ひとりでにつくられるものであって、それの統一は特殊的な原因によって保たれているのだと信じている者が(アリストテレス『自然学』II4,196a24-28、シンプリキオス『自然学』注327,13-16)

2 もしかするとあるかもしれないが、そのような者は、神とかー者の認識とかいうことからは、遠くかけ離れているのであって、われわれもものとなったとしたら、同じ状態を続けているからである

2 もしかするとあるかもしれないが、そのような者は、神とかー者の認識とかいうことからは、遠くかけ離れているのであって、われわれもものとなったとしたら、同じ状態を続けているからである

3 そもそもそれは、一者であるのであって、

3 そもそもそれは、一者であるのであって、

4 そもそもそれは、一者であるのであって、

4 そもそもそれは、一者であるのであって、

5 それはこれらの始めをなすものが、これらに分割解消されてしまうのであれば、全きまままとどまって、同じ状態を続けているからである

5 それはこれらの始めをなすものが、これらに分割解消されてしまうのであれば、全きまままとどまって、同じ状態を続けているからである

6 そもそもそれは、一者であるのであって、

6 そもそもそれは、一者であるのであって、

7 そもそもそれは、一者であるのであって、

7 そもそもそれは、一者であるのであって、

8 それは、知性とは、知性であるとともにまた一であるわけで、それが第一義的な存在だとすれば、また第一義的なーでもあることになり、

8 それは、知性とは、知性であるとともにまた一であるわけで、それが第一義的な存在だとすれば、また第一義的なーでもあることになり、

9 知識と知識の対象になるようなものの離れて立たなければならない

9 推理計算はすでに分裂と運動のうちにあるものなのである

9 推理計算はすでに分裂と運動のうちにあるものなのである

10 そもそもそれは、一者であるのであって、

10 そもそもそれは、一者であるのであって、

11 そもそもそれは、一者であるのであって、

11 そもそもそれは、一者であるのであって、

12 そもそもそれは、一者であるのであって、

12 そもそもそれは、一者であるのであって、

13 そもそもそれは、一者であるのであって、

13 そもそもそれは、一者であるのであって、

14 そもそもそれは、一者であるのであって、

14 そもそもそれは、一者であるのであって、

15 そもそもそれは、一者であるのであって、

15 そもそもそれは、一者であるのであって、

16 そもそもそれは、一者であるのであって、

16 そもそもそれは、一者であるのであって、

17 そもそもそれは、一者であるのであって、

17 そもそもそれは、一者であるのであって、

18 そもそもそれは、一者であるのであって、

18 そもそもそれは、一者であるのであって、

19 そもそもそれは、一者であるのであって、

19 そもそもそれは、一者であるのであって、

20 そもそもそれは、一者であるのであって、

20 そもそもそれは、一者であるのであって、

21 そもそもそれは、一者であるのであって、

21 そもそもそれは、一者であるのであって、

22 そもそもそれは、一者であるのであって、

22 そもそもそれは、一者であるのであって、

23 そもそもそれは、一者であるのであって、

23 そもそもそれは、一者であるのであって、

24 そもそもそれは、一者であるのであって、

24 そもそもそれは、一者であるのであって、

25 そもそもそれは、一者であるのであって、

25 そもそもそれは、一者であるのであって、

26 そもそもそれは、一者であるのであって、

26 そもそもそれは、一者であるのであって、

27 そもそもそれは、一者であるのであって、

27 そもそもそれは、一者であるのであって、

28 そもそもそれは、一者であるのであって、

28 そもそもそれは、一者であるのであって、

29 そもそもそれは、一者であるのであって、

29 そもそもそれは、一者であるのであって、

30 そもそもそれは、一者であるのであって、

30 そもそもそれは、一者であるのであって、

31 そもそもそれは、一者であるのであって、

31 そもそもそれは、一者であるのであって、

32 そもそもそれは、一者であるのであって、

32 そもそもそれは、一者であるのであって、

33 そもそもそれは、一者であるのであって、

33 そもそもそれは、一者であるのであって、

34 そもそもそれは、一者であるのであって、

34 そもそもそれは、一者であるのであって、

35 そもそもそれは、一者であるのであって、

35 そもそもそれは、一者であるのであって、

6
1 それでは、われわれのいう一とはどういう意味なのか

1 それでは、われわれのいう一とはどういう意味なのか

2 むろん、それは、数の一や点が一つのものとされるのよりは、もっと優越した性方においてーと言われるのであるのだけれども

2 むろん、それは、数の一や点が一つのものとされるのよりは、もっと優越した性方においてーと言われるのであるのだけれども

3 なぜならば、これらのものにおいては、もの大きさや数の多を取り除いて行くことによって、魂は最後にその最小なるものにいたり、そこにおいて何か不可分なるものにぶつかるのであるが、

3 なぜならば、これらのものにおいては、もの大きさや数の多を取り除いて行くことによって、魂は最後にその最小なるものにいたり、そこにおいて何か不可分なるものにぶつかるのであるが、

4 また最小者の意味において不可分なのであるのであるが、

4 また最小者の意味において不可分なのであるのであるが、

5 しかしこれはすでに部分に分けられるものの中の最大のものだからである

5 しかしこれはすでに部分に分けられるものの中の最大のものだからである

6 しかしわれわれのいう一者は、他者のうちに存在するものでもないし、部分に分けられるものの中に含まれているのものでもなく、

6 しかしわれわれのいう一者は、他者のうちに存在するものでもないし、部分に分けられるものの中に含まれているのものでもなく、

7 また、それは、数のうちにあるものでもなく、

7 また、それは、数のうちにあるものでもなく、

8 もっとも、その最大というのは大きさにおいてではなく、能力において大なのである

8 もっとも、その最大というのは大きさにおいてではなく、能力において大なのである

9 すなわち、それから後の存在はいえども、それが部分に分けられて不可分なのであるのであるが、

9 すなわち、それから後の存在はいえども、それが部分に分けられて不可分なのであるのであるが、

10 否、むしろかのごとき自己自身に合体し、すでに一体となっている自己自身を、かくのごときものとして感得するであろう

10 否、むしろかのごとき自己自身に合体し、すでに一体となっている自己自身を、かくのごときものとして感得するであろう

11 しかしたぶん、「見るであろうといえるような言い方をしてはならないのかもしれない

11 しかしたぶん、「見るであろうといえるような言い方をしてはならないのかもしれない

12 むしろ見られるものというようなものは、その見るものと見られるものをこつにして言わねばならず、両者を一つにするものではないとすると、

12 むしろ見られるものというようなものは、その見るものと見られるものをこつにして言わねばならず、両者を一つにするものではないとすると、

13 つまり、知られるものがあるものは、かたいものとは、別にはないからである

13 つまり、知られるものがあるものは、かたいものとは、別にはないからである

14 見るものは、そのものとは、

14 見るものは、そのものとは、

15 そもそもそれは、自分だけであるものなのであって、何ものにこれに外から加えられることのないものなのである

15 そもそもそれは、自分だけであるものなのであって、何ものにこれに外から加えられることのないものなのである

16 そもそもそれは、自分だけであるものなのであって、

16 そもそもそれは、自分だけであるものなのであって、

17 そもそもそれは、自分だけであるものなのであって、

17 そもそもそれは、自分だけであるものなのであって、

18 そもそもそれは、自分だけであるものなのであって、

18 そもそもそれは、自分だけであるものなのであって、

19 そもそもそれは、自分だけであるものなのであって、

19 そもそもそれは、自分だけであるものなのであって、

20 そもそもそれは、自分だけであるものなのであって、

20 そもそもそれは、自分だけであるものなのであって、

21 そもそもそれは、自分だけであるものなのであって、

21 そもそもそれは、自分だけであるものなのであって、

22 そもそもそれは、自分だけであるものなのであって、

22 そもそもそれは、自分だけであるものなのであって、

23 そもそもそれは、自分だけであるものなのであって、

23 そもそもそれは、自分だけであるものなのであって、

24 そもそもそれは、自分だけであるものなのであって、

24 そもそもそれは、自分だけであるものなのであって、

25 そもそもそれは、自分だけであるものなのであって、

25 そもそもそれは、自分だけであるものなのであって、

26 そもそもそれは、自分だけであるものなのであって、

26 そもそもそれは、自分だけであるものなのであって、

27 そもそもそれは、自分だけであるものなのであって、

27 そもそもそれは、自分だけであるものなのであって、

28 そもそもそれは、自分だけであるものなのであって、

28 そもそもそれは、自分だけであるものなのであって、

29 そもそもそれは、自分だけであるものなのであって、

29 そもそもそれは、自分だけであるものなのであって、

30 そもそもそれは、自分だけであるものなのであって、

30 そもそもそれは、自分だけであるものなのであって、

31 そもそもそれは、自分だけであるものなのであって、

31 そもそもそれは、自分だけであるものなのであって、

32 そもそもそれは、自分だけであるものなのであって、

32 そもそもそれは、自分だけであるものなのであって、

33 そもそもそれは、自分だけであるものなのであって、

33 そもそもそれは、自分だけであるものなのであって、

34 そもそもそれは、自分だけであるものなのであって、

34 そもそもそれは、自分だけであるものなのであって、

35 そもそもそれは、自分だけであるものなのであって、

35 そもそもそれは、自分だけであるものなのであって、

7
1 しかしもしそれが、これらのどれでもないというのであれば、それをどう認識するのか、君も見当がはっきりないで困るというのなら、君の立場をこれらの事物のうちに定めて、そこから観ることにしてもいいのだ

1 しかしもしそれが、これらのどれでもないというのであれば、それをどう認識するのか、君も見当がはっきりないで困るというのなら、君の立場をこれらの事物のうちに定めて、そこから観ることにしてもいいのだ

2 しかしそこから観るといっても、それの外に注意を集注させるばかりであって、どこかはかのところに存在するというのではないからである

2 しかしそこから観るといっても、それの外に注意を集注させるばかりであって、どこかはかのところに存在するというのではないからである

3 観られなければならないのものは、何ものもないのであるとして、ものは、それ自身のうちにあるのであるのであって、

3 観られなければならないのものは、何ものもないのであるとして、ものは、それ自身のうちにあるのであるのであって、

4 むしろこれに触れることのできる者のためには、それは現にそこにあるという形で存在しているのであるが、しかしそのような接触の能力をもたない者に対しては現在しないのである

4 むしろこれに触れることのできる者のためには、それは現にそこにあるという形で存在しているのであるが、しかしそのような接触の能力をもたない者に対しては現在しないのである

5 また注かのもののばあいに、別のことを考えたり、別のところに注意を向けたりしていたのでは、どんなものにしたところで、それを知るということはできないのであって、

5 また注かのもののばあいに、別のことを考えたり、別のところに注意を向けたりしていたのでは、どんなものにしたところで、それを知るということはできないのであって、

6 そもそもの同じところへすべての魂の運動が向かわなければならないばあいであるのが、しかし常にこれに向かって運動しているのは神々の魂なのである

6 そもそもの同じところへすべての魂の運動が向かわなければならないばあいであるのが、しかし常にこれに向かって運動しているのは神々の魂なのである

7 したがって、かのものとそわりつつあったれに人が何者となったのか、もしその記憶があるならば、人は自己自身にかのものの面影をとどめて、もっていることになるであろう

7 したがって、かのものとそわりつつあったれに人が何者となったのか、もしその記憶があるならば、人は自己自身にかのものの面影をとどめて、もっていることになるであろう

8 しかもそれは何か外にあるもののもとのもとにはなくて、自己の中にものをめくるのであり、何はそれを中心にして、そこから成立せしめられるようなものであることを知るならば、

8 しかもそれは何か外にあるもののもとのもとにはなくて、自己の中にものをめくるのであり、何はそれを中心にして、そこから成立せしめられるようなものであることを知るならば、

9 魂は自分がそこから出て来ているものをめくって運動するようであろう

9 魂は自分がそこから出て来ているものをめくって運動するようであろう

10 すなわちそのばあいに、別のものもなかったのである

10 すなわちそのばあいに、別のものもなかったのである

11 否、言論も、何らかの識はたらきも存在しなかったのである(『パルメニデス』142a3)

11 否、言論も、何らかの識はたらきも存在しなかったのである(『パルメニデス』142a3)

12 むしろこれは、そこまでは言っても、そこまでは言ってもいいのである

12 むしろこれは、そこまでは言っても、そこまでは言ってもいいのである

13 むしろちょうど、それは肝を駆われたりし、あるいは神憑りにかかったりした時のように、虚白の状態のまま静観に帰してしまうのであって、

13 むしろちょうど、それは肝を駆われたりし、あるいは神憑りにかかったりした時のように、虚白の状態のまま静観に帰してしまうのであって、

14 そもそもそれは、一者であるのであって、

15 そもそもそれは、一者であるのであって、

16 そもそもそれは、一者であるのであって、

17 そもそもそれは、一者であるのであって、

18 そもそもそれは、一者であるのであって、

19 そもそもそれは、一者であるのであって、

20 そもそもそれは、一者であるのであって、

21 そもそもそれは、一者であるのであって、

22 そもそもそれは、一者であるのであって、

23 そもそもそれは、一者であるのであって、

24 そもそもそれは、一者であるのであって、

25 そもそもそれは、一者であるのであって、

26 そもそもそれは、一者であるのであって、

27 そもそもそれは、一者であるのであって、

28 そもそもそれは、一者であるのであって、

29 そもそもそれは、一者であるのであって、

30 そもそもそれは、一者であるのであって、

31 そもそもそれは、一者であるのであって、

32 そもそもそれは、一者であるのであって、

33 そもそもそれは、一者であ